
やっかみさん

黒漆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やっかみさん

【コード】

N0799G

【作者名】

黒漆

【あらすじ】

例年の通りにキノコ狩りを楽しむ男性。日常の延長にある通い慣れたはずの山中が突如変異した。原因は何に有るのか？やっかみさんが関わる山の怪異。

(前書き)

その内ホラー短編集でまとめるやもしれません。

秋が深まり季節の終わりを感じさせ、落ち葉が地面を隙間なく埋め始める頃。私はキノコを採集するためにある山奥まで足を伸ばしていた。それは毎年恒例の行事のようなもので、祖父がまだ生きていた頃、よく付き添いで連れ歩かされたものだった。それゆえ私にとっては慣れ親しんだ地元の山での散策なので当然恐れのような感情は無く、目的地も良く知った地で安心して向かう事ができるはずだと考えていた。今年も大量のキノコを籠かご一杯に詰めて帰ることを期待していた。

キノコ取りの名人とは食用とそうでない物を見分ける眼力が有る、と言うだけでは成り立たない。名人と呼ばれる人には必ず行きつけの山が存在し、キノコが毎年自生する場所を記憶しているのだ。つまりは名人はどれだけ、求めるものがどの場所に、どの時期、どれだけ生えるのかを記憶できるかが大切となってくる。

当然それには足が棒になるまで山中を歩き回らなければならないだろう。彼等はそれだけの苦労を経て、初めて名人になり得たわけだ。私とは言え、素人の横好き程度であって名人とは程遠い、趣味の領域を出ない腕だ。しかし私は祖父から伝授された秘密のキノコの自生場所を知っていた。そこへと足を運べば毎年必ず大量のキノコに有りつけると言うありがたい場所だ。今年も私の足はその場所へと向いていた。

見知った山と言えど危険は多い。落石、茨、崖、獣。危険を挙げ出せば切りがないが、特に恐ろしいのは山と言う土地自体なのだ。山とは生き物だと私の祖父が良く言っていた。天候でがらりと姿を変えてしまう恐ろしさ。気がつけば見知らぬ場所にいた、などと後

で気がついたところで遅いのだ。

落ち葉を踏みしめる音が続く、木々の葉は紅葉のピークを超えてしまったため、赤や茶よりも焦げ茶色と表現するのが相応しい色合いだ。枯れ落ちた葉の数も多いため、以前より空が近くある錯覚を覚えた。毎年私一人での散策なので度々心細さが纏わりつくが、これも祖父から受け継いだ場所を守るためならば致し方ない。やがて巨大な倒木が眼前に現れる。その木の周りには山ほどのキノコが生し、カサを大輪の花のように広げていた。この瞬間が何物にも変えがたい感動の時だ。この一瞬のために私達は採集を続けているとあって良い。私は時を忘れてキノコを壊さないよう、慎重に採集していた。気がつけば辺りは薄暗くなり始めていた。天気予報では降水確率0の晴天だったはずなのだが。しかし、山の天気は変わり易い、私はそろそろと身支度を整え、山を下ることにした。

籠を背負い、杖を支点に体を支え、登りで使った獣道を誤らぬようゆっくりと下る。なぜか今日は帰り道、胸騒ぎのような悪寒が付き纏った。薄曇りの空を見上げ、落ちが早い秋の日を思い、心中寒くなったのやも知れない。そのためだろうか、ふと、祖父の語った怪談を思い出す。

「わしがまだ若い頃だったが、一度だけやつかみさんと言うんだかわからん者に逢った事がある。そんな頃はわしは鉄砲撃ちでな、山に入ってはキジやらイノシシやらを撃っていた。奴等は人の気配には敏感でな。わしら狩しに行った連中は奴等に悟られんよう自分だけの隠れ場所をつくった。その日は随分大量でな。いのしし一頭、キジ二羽撃った、そいつはわしもいい気持ちでな。血抜きをやった後背負って山道あるいとった。したらな、わしの頭の上で声がかしたんだ。置いていけ、置いていけてな。わしは豪快な人間だ、少なくともそんな時はその気でいた。そんな頃にや若さも有ったからな。だがな、あれを見たら腰抜けだ強気だなど、そんな事は言っておれ

ん。そいつは、わしの前に現れた。森ん中の木を揺らす音がしてな、あつという間にわしの前にそいつは現れた。真つ黒な顔のないサルに見えたな。顔にゃあ何にも無い、抉えぐれて潰れとるだけだったわ。そいつが置いてけと言ひ寄った。わしはもう何も考えられんでな、全てを放り出して逃げ帰った。怖いものなんぞ無いと豪語してたわしもそんな時は流石に懲りたわ、鉄砲撃ちはそれつきり止めた」

そつだ、確かそんな話だったはずだ。気がつけば獣道が途切れていた、確かに覚えておいた道を辿たどったはずだ、だが道がない。やがて木々を揺らすザザといった音が聞こえ始めた。そんなばかな、私は今回動物は殺してはいない。ただ、キノコを採集しただけなのだ。祖父はそれから山に入り山菜取りの趣味を繰り返していたが一度もやつかみさんに再びあつたとは言っていないかった。やつかむとは人の物を羨やいひむ事、嫉妬する事という意味で東北では使われている。ならばやはり私の大量のキノコが気に入らないのか。

辺りに生暖かい風が吹いた。落ちた葉が舞い上がり小さな竜巻を作つて森の奥へと消えてゆく。風と共に獣の様な生臭さが辺りに充満し始めた気がした。私は立ち止まり、地面を杖で三回叩く。獣などが近づいた時、この方法で自分の存在を相手に知らせれば要らぬ面倒を作らずに済むと祖父から教わっていたのだ。この場合は結構な傾斜で大きな岩でも有ればその下は何があるのか全く確認できない。目線の下に見える巨大な岩の後に何か、獣でも居るのだろうかと思つと少し心が落ち着かなくなった。

モツテイケ、モツテイケ

ふと、そんな声が耳に入る。風の音がそう聞こえただけだろうか。持つていけ？この状況を歓迎してくれているのか？すると頭上から一際大きな音がしたかと思うと、目の前にそれが現れた。木の上か

ら私の眼前に落ちてきたそれは、地面の落ち葉を撒き散らし、衝撃音を地面に鳴らせて着地した。祖父から伝えられた通りの寸分変わらぬ姿のものがそこに居た。手足が物凄く長い。顔以外は長い剛毛で覆われていて唯一皮膚が覗いている顔の部分は内側に抉えぐれるようにして入り込んで穴が開いていた。まるで木の洞の様だ。

モツテイケ、モツテイケ

奇怪な穴からそう音を漏らして猿の様なものは腕を上げ、三本しかない指で何かを指差した。その先には巨大な果物が落ちていた。良く熟れた柿のような色合いで林檎のような形をしている、それからは食欲をそそるような甘い甘美な香りが漂っている。先程までは確かに存在しなかったはずだ、私の中の何かが強烈に警告している。しかし、私の足は自然と果物へと向かっていた。近くへと寄ると改めてその果物の大きさに驚く、それは子供の身長に達するほど大きい。距離が縮まる事でなおの事その芳醇ほうじゆんな程の香りが私の食欲をそそり、自然と口の中が唾液で満たされる。

クツテシマエ　クツテイイゾ　クツテシマエ

私はとり憑かれた様にその果物に手を伸ばす。指が果物に届く寸前、雷鳴のような轟音が鼓膜を振るわせた。見ると手にしていた祖父の形見の杖が根本から二つに割れている。それは綺麗にささくれ一つ無く割れていた。啞然とすると同時にどうしようもない程の恐怖感が私の中で湧き出した。

途端、鼻腔をくすぐっていた甘い臭いが耐え切れない腐臭へと変わる。生ごみと魚のあらを混ぜて腐らせたような強烈な腐臭だ。見上げると、そこに有るのは果物などでは無く、見知らぬ男の変わり果てた死体だった。肉が溶け始め体中に虫がたかっているそれを、

私は掴つかもつとしていた。ザザザと音が聞こえ、私の周りで沢山の濃厚な気配が感じられ始める。

ケガレタ ケガレ モツテカエレ モチコムナ

そんな声なまが背後から聞こえる。汚けがれれた穢けがれれ、やつかみさんとは山神さんの訛なまりなのだ、私は今更ながら気がついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0799g/>

やっかみさん

2010年12月10日17時33分発行